



JPN Class

Online school - 日本語で学ぼう

中学

国語
一年

九月
第1週



学習を始める前に

①必ず用意してください

・ノート

(学習しやすいように、漢字のノートと国語のノートを分けるなど工夫をすること。)

・筆記用具 (赤ペンも用意すること。)

②注意

・大事だと思うところはノートに書いてください。

・このビデオで使っているスライドを印刷したい人は、最後の**お知らせ**を見てください。

・「ビデオを止めてください。」と言われたら、ビデオを止めて、先生の指示に従ってください。

・必要があるときは、ビデオを止めたり、もう一度ビデオを見たりするなど、それぞれ工夫をください。

小さな漁師町の浜から、小舟で半時間足らずで行き着ける大きな無人島があつて、あんちやと友達は、そこでウニを採るつもりだった。マキはその間じゆう、おとなしく貝がら拾いをしている約束で、連れていってもらえることになった。

ほんとは、**神戸**のおじさんが送ってくれた大きな緑色の麦わら帽子をかぶりたかつたからで、そいつは、その古びた漁師町の手辺でかぶるには、しゃれすぎたのだ。かんかん照りの小舟の上でなら、大いばりで日よけがわりとかぶっていられたが、そいつをかぶっている自分のことを想像すると、マキはやつぱりまぶしい思いで、頭がよけい熱くなつた。帽子のせいで、急に大人びて見えるマキのことが、あんちやも友達も、ちよつぱりまぶしそつだつた。

浜と目的の島とのちようど中ほど辺りに、いま一つ小さな無人島があつて、そこは、潮が満ちると、岩山の先つちよだけ残して沈んでしまふほどかわいなものだつたが、そのそばを歩き過ぎるとき、マキが声を上げた。

「あつ、カモメ。飛べないでいるみたい。」

降りて調べると言い張つて、舟を着けさせた。駆け寄つて見ると、やはり翼を傷つけたらしいカモメが、首を立て、くちばしを突き出して向つてきた。

「わたしここに残る。」

言い出したらきかない口調のマキに、

「じきに潮来るで、いかん。」

あんちやは止めたが、マキは動かかなかつた。

「勝手にすつとええわ。」おしまいに、渋い顔であんちやはふくれ、マキを残して、舟を出した。舟はすぐに小さくなり、大きな無人島の島かげを曲がつて、消えた。

しよつぱい風の中で、マキは長いことカモメと向かい合つていたが、カモメは無事な片方の翼で砂を飛ばしてマキを近づけなかつた。何かにおびえたような激しさなので、おまえの傷のことを心配して残つてやつたのにと、マキも舌打ちしたい気持ちになりかけたが、そこでやつと、カモメは麦わら帽子におびえているのだと気づいた。見知らぬ大きな島にでも見えて、怖かつたにちがいない。

帽子を脱ぐと、日の熱さが頭を燃やした。それでも、カモメがおとなしくなつたのに気をよくして、マキは髪のはてりを忘れていつた。

〈新出漢字〉

帽子 **ぼうし**

浜 **はま**

小舟 **こぶね**

沈む **しずむ**

翼 **つばさ**

渋い **しぶい**

ウニの数が多いのに夢中になって、あんちやたちも、マキのことをうっかり忘れていった。

潮が満ち始める。

小島は海におぼれ始める。

大事な大事な麦わら帽子なのに、マキはそこへカモメを入れていた。おとなしく入ってくれたことがうれしくて、麦わら帽子がぬれてしまっただめになることはかまわなかった。早く連れて帰りたいとあせる気持ちを、海の冷たさがくるぶしから冷やしていった。残された岩山のすみっこで、マキは麦わら帽子を抱えこみ、舟を待った。

声を上げてみても、始まらなかった。

ひざからももまで、海がひたした。マキは立ち上がり、くちびるをかんで向こうの角を見つめた。カモメもおとなしく帽子に収まっている。海のおいが強くなる。マキは、島を見つめることにつかれ、ちっとは怖い気持ちにもなつて、カモメを見つめることにした。小さな瞳の中に映る自分の小麦色の顔が、くしやんとゆがんでべそをかいていた。

海がおへそまで上がってくる。

マキは麦わら帽子を差し上げる。じきにつかれて腕がしびれてくる。

麦わら帽子が揺れる。

その揺れに驚いたように、カモメが大きく翼を差し上げ、激しくはばたかせた。それが小さな白い旗に見えて、

「あつ、あそこじゃ。」

あんちやたちが、舟をまつすぐに飛ばしてくることができた。

小舟に引き上げられて、やっとおぼれずにすんだマキは、口をきかず、引き上げたあんちやたちも口がきけず、カモメのはばたきの音だけが、妙に大きく聞こえた。

マキの言いたい言葉は、ぐっしよりぬれた麦わら帽子を抱きしめる、か細い腕が語っていた。

〈新出漢字〉

脱ぐ

揺れる

みょう
妙

麦わら帽子は乾いたけれど、形がくずれ、色も落ちて、おかしなぶかぶかの帽子になってしまった。
けれどもマキは、大いばりでそいつをかぶって浜を歩く。そんなマキの頭の上を、犬みたいに付きまとして飛ぶカモメがいて、マキはそれが得意だったのだ。

あんちやたちは、ひと夏じゆう、マキも麦わら帽子もカモメも、まぶしくて見るができなかつた。



〈新出漢字〉

かわ
乾く

小さな漁師町の浜から、小舟で半時間足らずで行き着ける大きな無人島があつて、あんちやと友達は、そこでウニを採るつもりだった。マキはその間じゆう、おとなしく貝がら拾いをしている約束で、連れていってもらえることになった。

ほんとは、神戸のおじさんが送ってくれた大きな緑色の麦わら帽子をかぶりたかつたからで、そいつは、その古びた漁師町の海辺でかぶるには、しゃれすぎたのだ。かんかん照りの小舟の上でなら、大いばりで日よけがわりとかぶっていられたが、そいつをかぶっている自分のことを想像すると、マキはやつぱりまぶしい思いで、頭がよけい熱くなつた。帽子のせいで、急に**大人びて**見えるマキのことが、あんちやも友達も、ちよつぱりまぶしそつだつた。

浜と目的の島とのちようど中ほど辺りに、いま一つ小さな無人島があつて、そこは、潮が満ちると、岩山の先つちよだけ残して沈んでしまふほどかわいものだつたが、そのそばを歩き過ぎるとき、マキが声を上げた。

「あつ、カモメ。飛べないでいるみたい。」

降りて調べると**言い張つて**、舟を着けさせた。駆け寄つて見ると、やはり翼を傷つけたらしいカモメが、首を立て、くちばしを突き出して向つてきた。

「わたしここに残る。」

言い出したらきかない**口調**のマキに、

「じきに潮来るで、いかん。」

あんちやは止めたが、マキは動かなかつた。

「勝手にすつとええわ。」おしまいに、渋い顔であんちやはふくれ、マキを残して、舟を出した。舟はすぐに小さくなり、大きな無人島の島かげを曲がつて、消えた。

しよつぱい風の中で、マキは長いことカモメと向かい合つていたが、カモメは無事な片方の翼で砂を飛ばしてマキを近づけなかつた。何か**おびえた**ような激しさなので、おまえの傷のことを心配して残つてやつたのにと、マキも舌打ちしたい気持ちになりかけたが、そこでやつと、カモメは麦わら帽子におびえているのだと気づいた。見知らぬ大きな島にでも見えて、怖かつたにちがいない。

帽子を脱ぐと、日の熱さが頭を燃やした。それでも、カモメがおとなしくなつたのに気をよくして、マキは髪のはてりを忘れていつた。

〈新出漢字〉

帽子

浜

小舟

沈む

翼

渋い

場面1

〈あらすじ〉

ウニ採りに出かけるあんちやたちについていったマキは、小島で傷ついたカモメを見つけて、そこに一人で残った。

〈マキ気持ちの移り変わり〉

<p>マキの行動</p>	<p>マキの気持ち</p>
<p>あんちやたちのウニ採りに連れて行ってもらおう。</p>	<p>大きな緑色の帽子をかぶりたかった。 マキはやっぱりまぶしい思いで頭が余計熱くなった。</p>
<p>翼を傷つけたらしいカモメを見つけ、一人で小島に残る。</p>	<p>カモメへの気持ち カモメの傷を心配してる。</p>
<p>カモメがおびえている理由に気づき、帽子を脱ぐ。</p>	<p>カモメへの気持ち おびえるカモメに舌打ちしたい気持ちになりかけたが、カモメがおとなしくなり、気をよくした。</p>

ウニの数が多いのに夢中になって、あんちやたちも、マキのことをうっかり忘れていった。

潮が満ち始める。

小島は海におぼれ始める。

大事な大事な麦わら帽子なのに、マキはそこへカモメを入れていた。おとなしく入ってくれたことがうれしくて、麦わら帽子がぬれてしまっただめになることはかまわなかった。早く連れて帰りたいとあせる気持ちを、海の冷たさがくるぶしから冷やしていった。残された岩山のすみっこで、マキは麦わら帽子を抱えこみ、舟を待った。

声を上げてみても、始まらなかった。

ひざからももまで、海がひたした。マキは立ち上がり、くちびるをかんで向こうの角を見つめた。カモメもおとなしく帽子に収まっている。海のおいが強くなる。マキは、島を見つめることにつかれ、ちっとは怖い気持ちにもなつて、カモメを見つめることにした。小さな瞳の中に映る自分の小麦色の顔が、くしやんとゆがんでべそをかいていた。

海がおへそまで上がってくる。

マキは麦わら帽子を差し上げる。じきにつかれて腕がしびれてくる。

麦わら帽子が揺れる。

その揺れに驚いたように、カモメが大きく翼を差し上げ、激しくはばたかせた。それが小さな白い旗に見えて、

「あつ、あそこじゃ。」

あんちやたちが、舟をまつすぐに飛ばしてくることができた。

小舟に引き上げられて、やっとおぼれずにすんだマキは、口をきかず、引き上げたあんちやたちも口がきけず、カモメのはばたきの音だけが、妙に大きく聞こえた。

マキの言いたい言葉は、ぐっしよりぬれた麦わら帽子を抱きしめる、か細い腕が語っていた。

〈新出漢字〉

脱ぐ

揺れる

みょう
妙

場面2

〈あらすじ〉

潮が満ち始め、小島はしだいに沈んでいった。
マキは麦わら帽子にカモメを入れて、あんちやたちが来るのを待った。危ないところで、あんちやたちの小舟に引き上げられた。

〈マキ気持ちの移り変わり〉

マキの行動	潮が満ちて小島が沈み始める。 帽子にカモメを入れて、舟を待つ。	マキの気持ち	カモメがおとなしく帽子に入ってくれたことがうれしくて、帽子がぬれてだめになることはかまわなかった。
マキの体が、どんどん海の水にひたってくる。	マキ自身の気持ち ちつとは怖い気持ちにもなった。 マキの顔がくしゃつとゆがんでべそをかいていた。	小舟に引き上げられる。	マキの様子から 口をきかなかった。言いたい言葉は、か細い腕が語っていた。

麦わら帽子は乾いたけれど、形がくずれ、色も落ちて、おかしなぶかぶかの帽子になってしまった。
けれどもマキは、大いばりでそいつをかぶって浜を歩く。そんなマキの頭の上を、犬みたいに付きまとして飛ぶカモメがいて、マキはそれが得意だったのだ。

あんちやたちは、ひと夏じゅう、マキも麦わら帽子もカモメも、まぶしくて見るができなかった。



〈新出漢字〉

かわ
乾く

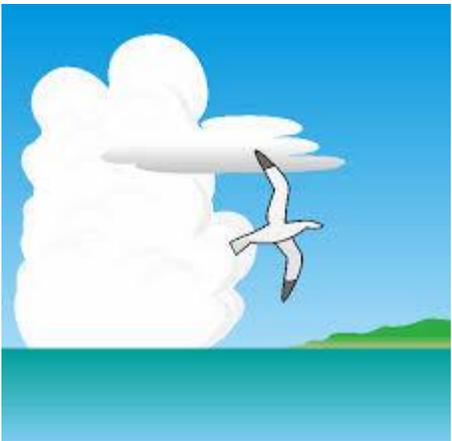
場面3

〈あらすじ〉

形がくずれ、色も落ちた麦わら帽子をマキは大いばりでかぶり、カモメはマキの頭上をつきまとしてとんでいた。

〈マキ気持ちの移り変わり〉

マキの行動	マキの気持ち
形のくずれた帽子をかぶって、浜を歩く。	カモメが頭上に付きまとして飛んでいるのが得意だった。



主題をまとめてみよう。

- ① マキはなにを経験したか。
マキは危険な状況の中で、大事にいていた麦わら帽子をだめにしてまでも、傷ついたカモメを守ろうとした。
- ② この経験を通して、マキはある種の自信とほこりをもった。

漢字の学習

- (1) 麦わら帽子をかぶる。
- (2) 漁師が浜で船を直す。
- (3) 小舟で島に行く。
- (4) 小さい岩山が沈む。
- (5) 翼を傷つけたカモメを見つけた。
- (6) 渋い顔でマキを見た。
- (7) ぬれた帽子を脱いだ。
- (8) 台風で船が揺れる。
- (9) 風の音が妙に大きく聞こえる。
- (10) 洋服が暑さで乾く。

重要語句の確認

大人びる

外見や態度が大人らしくなる。

言い張る

強く主張する。

言い出す

言い始める。

口調

話し方。

おびえる

怖がってびくびくする。

舌打ち

いらだちや残念な気持ちで、舌を鳴らすこと。

ほてり

顔や体が熱くなること。

宿題

次回の授業までにやる勉強です。

1. 漢字

今日の授業で書いた新出漢字の練習。

文章で書けるように、新出漢字以外の漢字も復習のため練習しましょう。

2. 音読 「麦わら帽子」を読みましょう。

3. 言葉の勉強

「言い張る」「口調」を使って、文を作りましょう。



お知らせ

1. 質問があったら、メールをください。すぐお返事します。
 2. 自分が書いた文章を見てもらいたいときはメールで送って
くれば、直して送り返します。
- ❖ メールアドレスは、Webページ <http://JPNCClass.com> を
見てください。
 - ❖ このビデオのスライドもWebページからダウンロードや印刷が
できます。



JPN Class

Online school - 日本語で学ぼう

中学

国語 一年

年間学習表



身につけたい力

7月	6月	5月	4月	
		発見したことを伝えよう スピーチの構成を考え、 メモをもとにスピーチ をしよう。	野原はうたう 好きな詩を、登場する 生き物の気持ちになっ て朗読しよう。	話す／聞く 一年間の学習を通して 先生の話を聞き、学習 を進めよう。
文章の推敲と原稿用紙の 使い方 推敲のポイントと原稿 用紙のうえでの推敲の 仕方を知ろう。原稿用 紙の決まりを確かめよ う。	情報を文章にまとめよう 自分の身の回りのこと について、情報を集め、 文章にまとめよう。	発見したことを伝えよう スピーチの構成を考え、 スピーチメモを書こう。	野原はうたう 自分の好きな生き物を 選んで、詩を作ろう。	書く 新聞記事 記事の要約をし、記事 に対する自分の意見 ^{コメント} や感想を書こう。
光と風からもらった贈り 物 筆者が「高原」のどん なところに、言葉の豊 かさを感じているかを とらえよう。	クジラたちの声 クジラの情報伝達に関 する二つの問いをおさ え、音の役割、海中で の情報伝達に音が最適 である理由をつかもう。	ちよつと立ち止まって 各図の説明を通して、 ものの見方について、 筆者が述べていること をとらえよう。	野原はうたう 作者が生き物の姿にど んな思いを感じている かを、読み取ろう。 にじの見える橋 少年の行動や心情に着 目し、にじを見る前と あとの気持ちの変化を とらえよう。	読む 新聞記事 新聞記事を読もう。
混同しやすい漢字 形が似ていたり音が同 じであったりする漢字 を知り、間違えて使わ ないように気をつけよ う。	言葉の単位 文節や単語に区切る方 法を知ろう。	漢字の組み立てと部首 漢字の部分のよび名と 表すものを覚えよう。	話し言葉と書き言葉 話し言葉と書き言葉の 違いをおさえよう。	言葉

12月	11月	10月	9月	8月	
	<p>いろは歌 仮名みの原文を、古 文の調子にのって読み、 聞いてもらおう。</p>				話す／聞く
<p>未来をひらく微生物 環境問題について課題 を見つけ、レポートに まとめよう。</p>		<p>大人になれなかった弟た ちに・・・ 心に残ったこと、自分 の生活と比べてどんな ことを考えたのか、感 想文を書こう。</p>	<p>手紙を書こう 手紙の形式を知り、目 的や相手を考え、手紙 が書けるようになるう。</p>	<p>さつき 読み取った内容を、自 分自身の体験と重ねて 感想を書こう。 読書記録 読んだ本の読書記録を 書いて残そう。</p>	書く
<p>未来をひらく微生物 自然の仕組みの中で、 微生物の働きが、環境 問題の解決どのよう に利用されているのか読 み取ろう。</p>	<p>いろは歌 古文の言葉の響きや調 子に読み慣れよう。 蓬萊の玉の枝 古典に対する興味や関 心をもつて読もう。 今に生きる言葉 漢文独特の言い回しに 慣れよう。「矛盾」が どんなエピソードから どんな意味に使われる ようになったのか確か めよう。</p>	<p>大人になれなかった弟た ちに・・・ 表現に着目し、登場人 物の心情や作者の思い を読み取ろう。</p>	<p>麦わら帽子 麦わら帽子やカモメに 対するマキの気持ちと、 その移り変わりを読み 取ろう。</p>	<p>さつき 助けを呼びに走る場面 や、助かった正作を見 上げる場面の、惇の胸 中を表す言葉に注目し て読もう。</p>	読む
<p>文の組み立て 文の成分のそれぞれの 働きや、文節どうしの 関係を理解しよう。</p>	<p>古典の言葉 文語と口語の違いを考 えよう。 漢字の音訓 音と訓それぞれの読み 方と、意味を考えよう。</p>	<p>漢字四字の熟語 漢字四字の意味をおさ えよう。</p>	<p>漢語・和語・外来語 漢語・和語・外来語の 分類ができるようにな るう。</p>		言葉

	3月	2月	1月	
				話す／聞く
		心に残る思いで読み手の興味を引くように、発表しよう。		
	言葉を調べよう 言葉についての課題を調べ、資料にまとめる。	心に残る思いで今までの経験で、自分が成長したと思えることや、変わったと思うことを思い出して、文章にまとめよう。	江戸からのメッセージ 江戸の知恵を今の時代に生かせることは何か考え、それをまとめよう。	書く
	胸の底の人と言葉たち 人や言葉との出会いを読み取り、筆者がわたしたちに願うことは何かを考えよう。	少年の日の思い出 登場人物の心情の移り変わりをとらえ、生き方を考えよう。	江戸からのメッセージ リサイクルを徹底した江戸っ子の生活と、そこから導かれた筆者の主張をつかもう。	読む
〈一年生の漢字〉 一年生で習った漢字の復習をしよう。		漢字の成り立ち 漢字の成り立ちをおさえ、成り立ちで意味や読みを類推できることを知ろう。	辞典を活用しよう 国語辞典、漢和辞典の使い方を知り、実際に様々な言葉を調べよう。	言葉
		指示する語句と接続する語句 指示する語句と接続する語句の種類や用法を理解しよう。		